

後期中觀派とダルマキールティ (1)

——縁起を巡る論争：pratītyasamutpādahetu——

森 山 清 徹

目 次

略 号

序

〔1〕 縁起無自性論と縁起有自性論——Māl 前主張等——

〔2〕 pratītyasamutpāda と二諦説

〔3〕 ダルマキールティの因果論と自性 (svabhāva)

結 論

〔4〕 資 料——Māl 後主張和訳——

〔5〕 カマラシーラの pramāṇa 論解説

略 号

AAPV; Haribhadra, *Abhisamayālaṅkāralokā Prajñāpāramitāvyākhyā*, ed. by U. Wogihara. 1973., p. Vol. 90. No. 5189.

BhK; Kamalaśīla, *Bhāvanākrama*, Minor Buddhist Text Part I & II, ed. by G. Tucci 1978. Rinsen Book Company, Kyoto.

D; the sDe dge edition, preserved at the Faculty of Letters, University of Tokyo.

HB; E, Steinkellner, Dharmakīrti's *Hetubinduḥ*, Teil I, Tibetischer Text und rekonstruierter Sanskrit-Text, Wien 1967.

Ichigō; M. ICHIGŌ, MADHYAMAKĀLĀMĀRĀ. 1985.

MAK; Śāntarakṣita, *Madhyamakalāṃkāra-kārikā*, cf. Ichigō.

Māl; Kamalaśīla, *Madhyamakaloka* (P. No. 5284. Vol. 101. Sa143b²-275a⁴, D. No. 3887. DBU MA, Vol. 12. Sa133b⁴-244a⁷)

MAP; Kamalaśīla, *Madhyamakalāṃkāra-pañjika*, cf. Ichigō.

MAT; Candrakīrti, *Madhyamakāvatāra*, publiée par Louis de la Vallée Poussin, Bibliotheca Buddhica. IX. MEICHO-FUKYŪ-KAI, 1977.

MAV; Śāntarakṣita, *Madhyamakalāṃkāra-vṛtti*, cf. Ichigō.

MMK; Nāgārjuna, *Mūlamadhyamakakārikās (Mādhyamikasūtras)*

avec la *Prasannapadā* Commentaire de Candrakīrti. publiée par Louis de la Va-

- Ilée Poussin, Bibliotheca Buddhica IV, MEICHO-FUKYŪ-KAI, 1977.
 NB(Ṭ); Dharmakīrti, *Nyāyabindu*. Dharmottara, *Nyāyabindu-Ṭīkā*, Bibliotheca Buddhica VII. MEICHO-FUKYŪ-KAI, 1977.
 P; the Pekin edition, The Tibetan Tripiṭaka, ed by Daisetz Suzuki, Tokyo-Kyoto 1954-1963.
 PV; Dharmakīrti, *Pramāṇavārttika*.
 PVṬ(Ś); Śākyabuddhi, *Pramāṇavārttikaṭīkā*, D. No. 4220.
 SDK; Jñānagarbha, *Satyadvayavibhaṅga-kārikā*, D. No. 3881.
 SDP; Śāntarakṣita, *Satyadvayavibhaṅga-pañjikā*, D. No. 3883.
 SDV; Jñānagarbha, *Satyadvayavibhaṅga-vṛtti*, D. No. 3882.
 戸崎(上)(下); 戸崎宏正, 『仏教認識論の研究』上巻(1979), 下巻(1985).
 TS, TSP; *Tattvasaṅgraha* of Śāntarakṣita, -*pañjikā* of Kamalaśīla, ed. by S. D. Shastri.

序

Kamalaśīla により命名される「縁起を理由」(pratītyasamutpādahetu) とする無自性論証の証因自体が示すように、「無自性」を「縁起」によって根拠付けることは、『般若経』以来 Nāgārjuna⁽³⁾ へ、さらにその後の中観派へと継承されるものである。特に Nāgārjuna の『中論』の注釈を通じ、Bhāvaviveka も、Candrakīrti も、その点に関して論述を重ねて来た。さらに、Jñānagarbha, Śāntarakṣita Kamalaśīla, Haribhadra という後期中観派にあっても、この点には、無自性論証及び二諦説の要として再々論じられている。特に Kamalaśīla にあっては、『四極端の生起を否定する証因』(catuṣkōtyutpādapratīṣedhahetu)⁽⁵⁾, 『一・多を欠いているという証因』(ekānekātvaiviyogahetu)⁽⁶⁾ 等による五つの無自性論証の中、『縁起を証因とする』(pratītyasamutpādahetu) 無自性論証として整備している。そこで、筆者の最も聞きたいと

(1) cf 本稿 fn (16a), (101a).

(2) 梶山雄一『般若経 空の世界』(中公新書422) pp. 186-194. 縁起と空.
 中村元『仏教思想6 空 上』(仏教思想研究会編) pp. 227-228.

(3) MMK VII-16 本稿 fn (122). 同, XV-1, 2 本稿 fn (107), (108). XXIV-18, 本稿 fn (123).

(4) Candrakīrti は, MAT. pp. 228^a-229^s. でも、無自性の根拠を縁起によって示している。小川一乗『空性思想の研究』p. 248 esp. fn ①.

(5) 拙稿『後期中観派の学系とダルマキールティの因果論——Catuṣkōtyutpādapratīṣedhahetu——』(仏教大学研究紀要通巻第73号) pp. 1-47.

(6) 江島恵教『中観思想の展開』pp. 232-233, 242-243.

Chr. Lindtner Atīśa's introduction to the two truths, and its sources. *Journal of Indian Philosophy*, 9, (1981). pp. 205-211.

Tom J. F. Tillemans: Two Tibetan Texts on the "Neither One Nor Many" Argument For Śūnyatā. *idem*, 12, (1984).

ころは、この *pratītyasamutpādahetu* は、無自性論証として、いかなる役割を担っているのか、また、それは、Nāgārjuna 以降の中観派の伝統を単に継承し無自性論証として整備したに留るものなのか、それとも、そこに際立った後期中観派としての特色を見出し得るものなのか、ということである。この問いかけの切っ掛けは、Kamalaśīla の *Madhyamakāloka* (Māl) の前主張で、中観派の「縁起なるが故に、無自性である」(以下、「縁起無自性」論と呼ぶ) に対し、「縁起なるが故に、有自性である」(以下、「縁起有自性」論と呼ぶ) が論争を交えている所⁽⁷⁾で、そこでの「縁起有自性」論は、Dharmakīrti の理論と特定し得ると考えたからである。してみれば、*pratītyasamutpādahetu* は、Dharmakīrti の理論——直接知覚 (*pratyakṣa*) 論、因果論——を破する目的で形成された無自性論証ということになり、Nāgārjuna とも、Bhāvaviveka や Candrakīrti とも、その論難のターゲットとする対論者の理論は、有自性論としては共通しても、別のものということになる。この点が実証し得るならば、中観仏教思想史の展開を探究する上からも、また後期中観派の「縁起」解釈を究明する点でも有益と考えられる。その実証方法として、Kamalaśīla の Māl 前・後主張を検索するに加え、Jñānagarbha, Śāntarakṣita, Haribhadra の「縁起」と「二諦説」の接点に関する論述を以下で考察するのである。

[1]—[4] では、縁起を根拠とする (*pratītyasamutpādahetu*) 無自性論証で、対論者の「縁起有自性」論は、Dharmakīrti の理論と特定出来ること、及び後期中観派の「縁起」解釈が、実世俗としては「生起」、勝義としては、勝義的自性の「不生」「無自性」という二諦説を視点としてなされる点を明確にしようとする。

[5] で、*pratītyasamutpādahetu* の論理学上の問題を Kamalaśīla の Māl に基づき、その *pramāṇa* 論を検索する。

【1】 縁起無自性論と縁起有自性論——Māl 前主張等——

Kamalaśīla の無自性論証の方式としての五形態のうち、Jñānagarbha, Śāntarakṣita, Kamalaśīla, Haribhadra に伝承されるものに、『四極端の生起を否定する証因』*catuṣkōtyutpāda-pratīṣedhahetu* がある。それは、Dharmakīrti の因果論を批判の対象として形成されたものである、⁽⁸⁾ということは先に明らかにした。これと並んで、後期中観派に特徴的なものとして、《一・多を欠いていることを理由とする (*ekānekatvavīyogahetu*) 無自性論証》⁽⁹⁾がある。この両者は、後期中観派を Bhāvaviveka や Candrakīrti の中観派と区分し得る特色を有するものである。その理由は、その両者が、Dharmakīrti の理論を活用しつつ、結局はそれを論難の対象とするからである。この意味で中観思想史を考察する上で特に重要であると言い得る。この他に、ここに取り挙げる《縁って生起しているものは、無自性である》とする論証形式がある。

(7) 本稿 [1]. fn (10)

(8) cf. 本稿 fn (5).

(9) cf. 本稿 fn (5) pp. 3-4. 序.

これは、Nāgārjuna 以来、言及されて来たものであり、それ自体は、後期中観派の特徴をなすとは言えない。しかし、この言わば、中観派の伝統的な無自性論証を Kamalaśīla が再度、取り挙げ「縁起を根拠とする証因」(pratītyasamutpādahetu) と命名し、整備する背景には、やはり、Dharmakīrti の理論を論難の対象としていたことが知られて来る。この点を以下で明らかにしよう。

Madhyamakāloka (以下 Māl) の前主張 (pūrvapakṣa) に以下のような論議がある。

[I] ^(10...)
[I-a] また、縁って生起しているもの (pratītyasamutpāda) は、自性という点で、寂靜 (śānta) ^(10a) である、と「中観派が」主張することも。

[I-b] この「立証因」は、不定 (anaikāntika) である。縁って生起しているもの (pratītyasamutpāda) と、自性を具えていること (sasvabhāva) は、互いに対立 (virudha) ^(10b) しないからである。

[I-c] 縁って生起しているものは、自性を有している (sasvabhāvata) と、よく知られている (prasiddha) ^(10b) から、立証因は、対立するもの (viruddha) でもある。空中の華 (ākāśapuṣpa) 等、諸の不生なもの (anutpanna) が、自性を有しているとは、^(10c) 知られない。もし、諸事物 (vastu) が、勝義的自性を有していないなら、そのとき、これ等は、世俗としても、^(10d) 自性を有し得ない。

勝義として (paramārthatas) 無なるものは、世俗として (saṃvṛtyā) も、自性という点で不生なるものであると、知られる。例えば、石女の息子のように。

無自性 (niḥsvabhāva) という点で等しいなら、例えば色等が顕現するように、それと同じように、兎の角等も、何故、顕現しないのであるか。この顕現の区別を確定するについて、^{(10e)...} ⁽¹⁰⁾ 「中観派の主張通りであれば」根拠が何も存在しない。

(10) Māl, P149a⁷-b⁴, D138b⁸⁻⁷. 後主張⇒fn (101).

(10a) cf. MMK VII-16, 本稿 fn (122).

(10b) cf. NB II-15, 本稿 fn (65). (14b).

(10c) 対論者にとって不生、無自性なものとは、空中の華 (ākāśapuṣpa) 等である。空中の華等は、中観派にとっても、元々無なるものである。中観派のいう不生、無自性とは、勝義の立場から、実世俗として因と縁によって生起する幻 (māyā) 等、縁って生起したものに対してである。⇒fn (10d). (112a).

(10d) Dharmakīrti にとり無自性なものとは、種 (jāti) や兎の角等 (PV 現量27) の因果効力 (arthakriyāsamārtha) を有さない世俗的存在 (saṃvṛtīsat) である (同, 3)。中観派の主張するように勝義としても無自性なら、世俗的存在はなおさら無自性であるから、勝義、世俗的存在は共に無自性となろう、というのが、ここでの中観派への批難であろう。

(10e) Dharmakīrti の見解によれば、一般相 (sāmānyalakṣaṇa) は、実在物ではなく、知に顕現しないものである (PV 現量48 ab)。つまり、因果効力 (arthakriyāsamārtha) を有するものではなく (同, 3, 50), 無自性なるものである (同, 30 cd)。兎の角等の無存在 (abhāva) は、なおさら、知に顕現せず、因果効力を有せず無自性なものである。一般相を有するものとも、無存在とも異なるものが、個別相 (sva-lakṣaṇa) である。(同, 51 ab) したがって、Dharmakīrti の理論では、色 (rūpa) 等の個別相を有するものと、兎の角等の無存在とは、知に対する顕現の有無によ

ここでの対論者の主張は、中観派の、「縁起無自性論」を勝義としての「縁起有自性論」の立場からの論難である。つまり、一切法無自性ならば、具体的な顕現を有する事物——色(rūpa)等と全く顕現しない無(abhāva)なる兎の角等とを区別する根拠が提示し得ないことになる、というものである。対論者にとって、前者つまり、色(rūpa)等は顕現を有し、勝義的にも有自性なものであり、後者——兎の角等は、無顕現なものであり、無自性なるものである。前者、後者の峻別の根拠は、顕現の有無であり、自性(svabhāva)の有無である。しかしながらこの前主張に対する Māl 後主張からは、その対論者を特定するに足る根拠及び論議の本質を探ることは、必ずしも容易ではない。というのはその後主張では、推論式の整合性を問うことが中心であり、また Nāgārjuna の『中論』等に言及し、対論者の見解の特徴を明確にし得ない。それ等は Māl の「縁起」を巡る他の部分に求められなければならない。

では、先の事柄に関し Kamalaśīla は、その峻別の根拠を何に求めているのであろうか。

(II)^(11...)
(II-a) また、非実在物(avastu)は、なんと^(11a)しても、知(vijñāna)を生起し得ないからであると、〔汝が〕言ったことも、不合理である。

で峻別される。しかしながら、一切法無自性を主張する中観派にあっては、色等の個別相を有するものと、兎の角等無存在とは、共に無自性である点で等しい故、色等が顕現するように兎の角等の無存在も顕現することになり、顕現の有無による識別の根拠が提示し得ない、というのが対論者の問いかけである。それに対し、中観派(Jñānagarbha)は、この問題点の解決策を二諦説に求める。そして、世俗の真実(samvṛtisatya)にも、実世俗、邪世俗の区分を設け、その区分の根拠を arthakriyāsamartha の有無・顕現の有無に求めるのである。(⇒SDV ad SDK 8, 12 本稿 fn (14 d)) さらに Śāntarakṣita は、邪世俗にも顕現を有するもの(陽炎、二月等)がある故、邪世俗を無分別・有分別と区分する。(⇒SDP, D27a' ad SDK 12 d) このアイデアも、Dharmakīrti が似現量(pratyakṣābha)を有分別、無分別に区分する(PV 現量 299, 300)〔⇒戸崎(上) pp. 392-393〕点から得たものである。この詳細は、1989年6月、ウィーンでの「第二回国際ダルマキールティ学会」で“The Later Mādhyamika and Dharmakīrti”と題し発表したものの一部に含まれる。その拙稿は、ウィーン大学 Ernst Steinkellner 博士のもとに本年10月末提出予定である。

(11) Māl P183b⁸-184b⁴, D168b⁵-169a⁷.

前主張(Māl P144a⁸-b², D134a⁷-b²) 論理(nyāya)によっても〔一切法無自性は立証され〕ない。というのは、まず、直接知覚(pratyakṣa)によって、あらゆる事物(vastu)は、自性を離れたもの(vivikta)であると知られない。その(直接知覚の)対象は、事物(vastu)だからである。非事物(avastu)は、無自性故、なんと^(11a)しても自性(svabhāva)を示すことによって知(vijñāna)を生起することは不合理であるからである。もし、〔知を〕生起せしめるなら、実在性^(11a)のもの(vastutva)となってしまう。事物の特性は、因果効力(arthakriyāsāmarthyā)であるからである。直接知覚(pratyakṣa)というものの、自性を具えているもの(sasvabhāva)なら、その場合、一切法無自性という主張(pratijñā)が、崩れよう。

この前主張が Dharmakīrti の見解であることは、特にアンダーラインの部分と、PV 現量 (50)〔戸崎(上) p. 119, fn (140)〕

jñānamātrārthakaraṇe 'py ayogyam ata eva tat /
tad ayogyatayā 'rūpaṁ tad dhy avastuṣu lakṣaṇam//

及び NB 1・15 arthakriyāsāmarthyalakṣaṇatvād vastunaḥ との一致から明らかであろう。cf. 本稿 fn (60)-(62).

(11a) cf. PV 現量 (50). cf. 本稿 fn (11), (62).

我々（中観派）も、兎の角等のような非実在物が、また、直接知覚（*pratyakṣa*）としての知（*jñāna*）を生起することは、認めない。けれども、一切法を、陽炎（*marīci*）や山びこ（*pratiśrutkā*）のようなものであると、あるがままに（*yathābhūtam*）修習している諸の偉大なヨーガ行者達は、真実の対象を修習している場合の最高の極みから生起した（*bhūtārthabhāvanāprakarṣaparyanta*^(11b)*jam*）三昧を獲得しているから、最も勝れた不可思議な力（*acintyaśakti*）を具えている故、それ等のヨーガ行者には、その（三昧による不可思議な力）によって諸のヨーガ行者が、まさしく直接知覚として、一切法無我を理解し得る、つまり、一切法無我の真実（*tattva*）を明瞭に直観するそういった知が、生起する。〔法集経に〕「真実とは、見ないこと（*adarśanam*）^(11c)である」、とあるが、絶対否定（*prasajyārūpa*）ではないのである。

【II-b】 また、その直接知覚（*pratyakṣa*）も、自性を有するもの（*sasvabhāva*）であるなら^(11d)、云々と言ったその事に関しても、一切法は、勝義として、不生である、ことと全く同じく直接知覚も、勝義としては（*paramārthatas*）、無自性（*niḥsvabhāva*）なのであるが、しかしながら、直接知覚等の世俗諦（*saṃvṛtisatya*）に依存しているあらゆる設定は、全く無迷乱である。

諸の中観派は、一切法が、勝義として、無自性であるとしても（=BhK 218, 21b⁶ *sarvadharmāṇāṃ paramārthato niḥsvabhāvatve'pi*）、どうして、あらゆる世間的習慣（*vyavahāra*）を断ち切ろうか。世間的習慣という見地からは、ヨーガ行者の知や他の凡夫の知や聖なる人等を設定する根拠を認めないのではない（=BhK 218, 21b⁶ *na ... saṃvṛtyā yogijñānam anyad vā pṛthagjñānaṃ neṣṭam*）。

【II-c】 しかし、あらゆる時に、世俗としても、根拠のないものは、世間的習慣としても、生起しないものである。例えば、兎の角等のように。（=BhK 218, 22a¹⁻² *kiṃ tu yasya saṃvṛtyāpi kāraṇaṃ nāsti sa saṃvṛtyāpi notpadyate/yathā śaśaviṣṇādi*）^(11e)〔世俗として〕^(11f...)根拠を有するものは、勝義的自性はなくとも、生起する。例えば、幻や映像等のように。

(11b) NB 1・11 *bhūtārthabhāvanāprakarṣaparyanta**jam yogijñānaṃ ceti*

ここで Kamalaśīla は、上記の Dharmakīrti のヨーガ行者の知の理論を逆用して、ヨーガ行者の直接知覚によって一切法無自性が直観され得ることを述べている。

(11c) cf. Māl P183b⁷⁻⁸ D168b⁴⁻⁵.

『聖法集経』にも、「一切法を見ないことが、勝れた観察である」と説かれる。

cf. SDV D4b¹, MAV. p. 286⁴⁻¹⁰.

BhK I [212] 17a4. *kathaṃ paramārthadarśanam/sarvadharmāṇāṃ adarśanam*.

(11d) cf. 前主張、本稿 fn (11).

(11e) =AAPV 972¹³⁻¹⁴ *ata eva saṃvṛtyā kāraṇavaikalyāc chaśaviṣṇāpādinām anutpattiḥ*.

(11f) この前後の Bhk との一致部分は、同じく Kamalaśīla の *Āryāvikalpapraveśadhāraṇī-ṭika*（聖入無分別陀羅尼廣釋）P. No. 5501. 166aa⁸-b² と一致する。

cf. *Āryaśālistambaka-ṭika*（聖稻芋経広釈）of Kamalaśīla, P. No. 5502. 184b⁷⁻⁸.

勝義としては、この縁起ということは、不生ということであるけれども、世俗としては、幻や映像のように、種々な因と縁の確定に依存するものであり、仮説として有である。

(=BhK 218, 22a², *yasya tu vidyate sa paramārthato 'liko' pi samutpadyata eva/yathā māyāpratibimbādī*) この幻等は、〔世俗としては〕縁って生起したものであっても、〔勝義としては〕実在するものとなってしまうのではない (=BhK 218-9, 22a²⁻³ *na ca māyādeḥ saṁvṛtyā pratītyasamutpāde paramārthato vastutvaprasaṅgaḥ*)。〔勝義的〕吟味とプラマーナによって拒斥されるからである。それと同様に、一切法は、縁って生起したものであっても、〔勝義としては〕実在するものとなってしまうことは全くない。プラマーナによって拒斥されるからである。その場合、呪文 (mantra) や業等によって象等種々な幻が、現われ出るように、諸の衆生の業と煩惱によって、生起等も現われ出るの⁽¹¹ⁱ⁾であって、諸のヨーガ行者の、自己の福德と智の集まりによって、ヨーギンの知 (yogijñāna) 等の幻も現われ出るに他ならない。種々な縁 (pratyaya) によって、その幻も、種々に顕現するからである^(11j) (=BhK 219, 22a³⁻⁴ *tatra yathā kleśakarmamāyāvaśāt sattvānām janmamāyā pravartate, tathā yoginām api puṇyajñānasambhāramāyāvaśāt yogijñānamāyā pravartata eva*)

ここで、Kamalaśīla によって示される、縁って生起したもの (pratītyasamutpāda) とは、世俗 (saṁvṛti) として根拠、原因 (kāraṇa) を有するもののことであり、勝義 (paramārtha) としての実在 (vastu) ではないということである。その具体的な例が幻等によって示される。したがって、世俗的にも原因 (kāraṇa) を有することのない兎の角等は、世俗としても生起しない、というものである。この、顕現を有する幻 (māyā) 等と、無顕現な兎の角等との峻別の根拠は、前者は世俗として原因 (kāraṇa) を有するものであり、後者は、世俗としても原因をもたないもの、という原因 (kāraṇa) の有無にある。つまり、Kamalaśīla によれば、勝義としての実在 (vastu) ではないが、世俗として、原因を有するものが、縁って生起したもの (縁起・pratītyasamutpāda) なのである。なぜなら、縁って生起したもの (pratītyasamutpāda)

(11g) Māl P184b¹, D169a⁵ は grags pa (prasiddha) であるが、コンテキストからして BhKI [219] 22a³, *tasya vicārākśamatvāt* によって読む。cf. 本稿 [VIII] 及び fn (14c).

(11h) cf. MAP p213⁶⁻⁸ 本稿 [VI] fn (16).

AAPV p884²⁵⁻²⁶. *tad api pratītyasamutpannatvān māyāvan niḥsvabhāvaṁ tattvato 'pagataikāntabhāvābhāvādirūpamārasārūpam.*

それ (無二知 advayajñāna) も、縁って生起したものであるから、幻のように、無自性であり、真実からすれば、全く存在と無存在等の思慮を超えた性質のものである。

AAPV p885¹¹⁻¹⁵ *yasmād evaṁ bhāvābhiniṣeṣena mukter anutpattir ato' pavādasamāropanāpanayanaprakṣepaṁ kasyacid dharmasyākṛtvedam eva pratītyasamutpannaṁ saṁvṛtyā tathyarūpaṁ rūpādinīḥsvabhāvādirūpato nirūpaṇīyam. evaṁ ca māyāgajenāparamāyāgajapārājayavad viparyāsanivṛtyā tattvadarsī vimucyata iti pratipattavyam.*

したがって、以上のように、存在に対する執着によって解脱は生起しない。それ故、損滅と増益を特徴とする排除と付加を、いかなるものに対してもなさないこのことこそが、世俗としては縁って生起した真実な性質のものであるが、色等の無自性等の性質という点から観察されなくてはならない。そのように、また、幻の象によって、他の幻の象が打ち負かされるように、顛倒を静めることによって真実の見解が現われ出る、と理解されなくてはならない。

(11i) cf. MAV. p216. ③④ 本稿 (VI), fn (16).

である幻等は、〔一・多等の〕（勝義的）吟味に耐え得ないからである（*tasya vicārākṣamatvāt*）。⁽¹²⁾

Kamalaśīla の *pratītyasamutpāda* に関する見解を整理してみると、

縁って生起したもの（*pratītyasamutpāda*）
 ↓
 世俗（*saṃvṛti*）として原因（*kāraṇa*）を有するもの
 ↓
 〔一・多等の〕勝義的吟味に耐え得ないもの（*vicārākṣamatva*）
 ↓
 幻（*māyā*）等
 ↓
 世俗としても原因を持たないもの
 ↓
 兎の角等

この *pratītyasamutpāda*（縁起）を世俗の二分化に基づき、実世俗（*tathyaṣaṃvṛti*）と明確に規定するのは、Śāntarakṣita である。

【III】〔反論〕 この世俗の特徴は、無存在（*avastu*）であるのか。もし、これ（世俗の特徴）が、無存在であるなら、経験的事実であり、承認されている、結果を設けること（*arthakriyā*）と対立しよう。

〔答論〕 それは、そういうことではないと答える。

考察しない限り素晴しく、生じ滅する性質を有し、結果を生起する効力を自性とするものが、世俗的なものであると知られなくてはならない。（MAK 64）

この世俗（*saṃvṛti*）とは、言葉（*śabda*）という世間的習慣（*vyavahāra*）だけを内容とするものではないのであって、経験的事実であり、承認されている事物（*vastu*）、つまり諸の縁って生起するもの（*pratītyasamutpāda*）は、（勝義的）吟味に耐え得ないから（*vicārākṣamatvāt*）^{…(13)}、実世俗（*tathyaṣaṃvṛti*）である。

この Śāntarakṣita の見解から、

結果を生起する効力（*arthakriyāsamārtha*）を自性とするもの
 ↓
 縁って生起するもの（*pratītyasamutpāda*）
 ↓
 実世俗（*tathyaṣaṃvṛti*）

この点からして、対論者を Dharmakīrti と想定することは、的はずれとは言えないであろう。なぜなら、*arthakriyāsamārtha* を自性とするものを、実世俗（*tathyaṣaṃvṛti*）と位置付けることにより、実世俗とは、経験的事実と矛盾するものでないことを示し、中観派の主張する世俗とは、無存在（*avastu*）ではないことを論じると共に、（一・多等の）勝義的吟味に耐え得ない、ことを根拠に *arthakriyāsamārtha* を自性とするものが、勝義的実在（*paramārthasat*）と規定する Dharmakīrti の見解を批判しているからである。しかし、その *pratītyasa-*

(12) cf 本稿 fn (11e), (14c).

(13) MAV p202³-204³, cf. [V] 本稿 fn (15), AAPV p637²⁶⁻²⁷, 9727⁻⁹.

ここに見られるような〔反論〕は Devendrabuddhi によって発せられる。松本史朗『仏教論理学派の二諦説(上)』（南都仏教第45号, S. 55. 12) p. 103 上 [3]。

mutpāda と二諦説を巡る論議で、対論者が Dharmakīrti であると特定し得る根拠は、さらに示されなければならないであろうし、何よりも、中観派の「縁起無自性」論に対し、Dharmakīrti が「縁起有自性」論者であると、後期中観派によって扱われている事実を示さなければならない。

Kamalaśīla は MAK. MAV 64 を解説する冒頭で次のように述べている。

【IV】^(14a) 勝義的自性は、否定される故、世俗の特徴を有するものとして確定される諸事物 (vastu) は、(1) 言葉 (śabda) という世間の習慣を内容とする世俗 (saṃvṛti) と言われるものなのか、あるいは、(2) 縁って生起しているもの (pratītyasamutpāda) であり、結果を設けるもの (arthakriyā) であり、牛飼いに至るまでの人々に常識となっているもの (prasiddha) つまり、協約 (saṃketa) に基づく世俗という言葉で表現されるものか、という二つの選言支がある。そのうち、(1) もし第一の主張のようであれば、その時、直接知覚 (pratyakṣa) 等によって拒斥される。というのは、言葉という世間の習慣は、一般 (sāmānya) [相] だけを対象 (viśaya) とするものであるから、^(14a) 縁って生起しているもの (pratītyasamutpāda) である事物 (vastu) の特徴 (lakṣaṇa) を対象として有するものではない。その一般 [相] も、構想された自性 (parikalpitasvabhāva) のものであるから、非事物 (avastu) であるなら、[世俗は] それ (非事物) を本性とするものと承認することは、諸事物 (vastu) の、周知の結果を設けること (arthakriyā) を損滅することになろう。一般 [相] は、結果を設けること (arthakriyā) に耐え得ないからである。^(14b) (2) もし、第二の主張のようであるなら、その時、名称 (nāman) という点で論争がある、と考えられる故、反論者が、「もし」と言ったのである。もし、ブラマナーによって吟味した場合、これ等縁って生起しているもの (pratītyasamutpāda) も、自性 (svabhāva) が成り立つなら、その時、それ (縁起有自性) に関して、世俗 (saṃvṛti) という言葉を述べるなら、名称という点で論争となろう。一・多 (ekāneka) 等によって「勝義として」吟味するなら、これ (縁って生起しているもの) 等に自性は適合しない。^(14d) その時、そのようなものについて、世俗という言葉を述べるなら、適合する故、^{...14)} どうして名称等 [の問題] となろうか。

この Kamalaśīla の見解を整理すれば、

pratītyasamutpāda (縁起)
||
arthakriyāsamārtha (因果効力)
||

(14) MAP p203¹⁻¹⁹, この部分は、一郷正道『講座・大乘仏教7—中観思想』(V. 瑜伽行中観派) p. 190-191. に訳出されるが、本稿との関係上、特に重要な部分であるので筆者の拙訳を挙げておく。

(14a) PV 現量 (183a) sāmānyaviśayāḥ śabdāḥ 戸崎 (上) p. 284. その fn(196).

(14b) cf. PV 現量 (3). 本稿 fn (18).

(14c) cf. 本稿 fn (10b)

(14d) cf. 本稿 (12)

svalakṣaṇa (個別相)
 ↓
 tathyaśaṁvṛti (実世俗)
 ↓
 niḥsvabhāva (勝義無自性)

これとは逆のものが、一般相 (sāmānyalakṣaṇa) を有するものであり、縁って生起したものでなく、構想された自性 (parikalpitasvabhāva) のものであり、arthakriyā を有さない、^(14e) 非事物 (avastu) である。すなわち邪世俗である。

この図式は、その先、Jñānagarbha によって先鞭がつけられている。SDK 8 に対する自注で、

【V】^(15...) 実在そのもの (vastumātra) [=個別相 (svalakṣaṇa)^(15a)] ということは、顕現するがままのもの (yathādarśana) [=直接知覚 (pratyakṣa)^(15b)] であって、因果効力 (arthakriyāsamārtha) を有するものだからである。諸の因 (hetu) と縁 (pratyaya) に依存して生起するものが、^{...15)} 実世俗諦 (tathyaśaṁvṛtisatya) であると知られなくてはならない。

さらに Kamalaśīla は、MAP で、「縁起」を世俗・勝義の二諦説の視点から言及している。

【VI】^(16...) 縁って生起すること (pratītyasamutpāda) は吟味しないなら、素晴らしいものと承認されるものに違いないが、勝義としてではない。勝義としては、有と無を超えた真如 (tathatā) に他ならない。……それ (Nāgārjuna 足下の Vyavahārasiddhi) から、呪文、薬、幻 (māyā) という喩例で、一切法が、縁起という証因 (rten ciñ 'brel par 'byañ ba ñid kyi gtan tshigs, pratītyasamutpādahetu)^(16a) によって、勝義として有と無を実として超えていることが証明されるのである。^{...16)}

さらにこの「縁起無自性」という点は、Kamalaśīla が先の見解【IV】を示した後、MAP で Śāntarakṣita の引用する Nāgārjuna『中論』XXIV-18 を解釈するところで明確に知られる。すなわち、

【VII】^(17...) 縁って生起している (pratītyasamutpāda) 諸の事物こそが、勝義的自性を欠いている

(14e) SDK 8. そのうち、構想されたものを欠いていて、実在のみのもの (vastumātra) であって、(因と縁) に依存して生起するものが、実世俗と知られなくてはならない。構想されたもの (parikalpita) は邪である。

SDK 12. 顕現する点では、類似していても、因果効力 (arthakriyāsamārtha) を有するから、また有しないから、実 (tathya) と邪 (atathya) という世俗 (saṁvṛti) の区分がなされる。

なお、Kamalaśīla は「諸事物が、縁起 (pratītyasamutpāda) を本性としていることが、依他起性 (paratantrasvabhāva) である。」と述べている。拙稿『Kamalaśīla の唯識思想と修道論』(仏教大学人文学論集第19号。S. 60. 12) p. 47¹⁸⁻¹⁹。

(15) SDV D5b⁴, cf. 【III】本稿 fn (13), AAPV p. 637²⁶⁻²⁷, 972⁷⁻⁹。

(15a) SDP D22b³。

(15b) SDP D44b⁴。

(16) MAP p. 213⁶⁻¹³, AAPV. p. 884²⁵⁻²⁷, 885¹²⁻¹⁵⇒本稿 fn (11g)。

(16a) 本稿 fn (1), (101a)。

(17) MAP p. 205⁶⁻⁹。

から空なのであるが、兎の角と同様な本体を有するからではない。したがって、〔中観派の縁起無自性は〕経験的事実等と矛盾することはない。^{…17)}

したがって中観派と対論者との決定的な相違は中観派が勝義として「縁起無自性」そして縁起を実世俗と位置付けるに對し対論者は、勝義として「縁起有自性」を主張する点にある。

これ等の論議のコンテクストからして、中観派の「縁起無自性」論の対立する見解を特定するなら、Dharmakīrti の *Pramānavārttika* 現量 (3) を挙げ得るであろう。

^{(18…}この場合、因果効力 (arthakriyāsamārtha) を有するものが、勝義的存在 (paramārthasat) である。他のものは、世俗的存在 (samvṛtisat) である。個別と一般相 (svasāmānyalakṣaṇa) の両者が示されたのである。^{…18)}

したがって、その対論者として、Śāntarakṣita, Kamalaśīla は、Dharmakīrti を想定していたであろう。では、Dharmakīrti は、中観派の「縁起無自性」論に對するような意味での「縁起有自性」論者と言い得るのであるだろうか。この点に言及する前に次の事柄を明確にしておこう。

先に Māl 前主張に對する後主張からは、中観派の勝義としての「縁起無自性」論に對する、勝義として「縁起有自性」論を展開する者として Dharmakīrti を Kamalaśīla が、想定しているという根拠を明白に見出し難いと述べた。それ故 Māl の他の部分に、その根拠を求めた。その結果、勝義としての「縁起有自性、無自性」論の展開は、arthakriyāsamārtha、及び二諦説の論議に組み込まれたものである故、対論者つまり Kamalaśīla によれば、勝義として「縁起有自性」論を主張するのは Dharmakīrti であると特定し得ることを示した。しかし、Kamalaśīla の論述は詳細であると共に、文献操作をまわって、このことが知られ得たのである。この点を直線的に示しているのが、以下に示す Haribhadra の論述である。それは、Śāntarakṣita の MAV, Kamalaśīla の MAP の論述の要約と言い得るものであり、また Māl 後主張とも符合する内容である。さらに Haribhadra の論述は、Dharmakīrti 批判である『四極端の生起の論難』⁽¹⁹⁾ catuṣkotyutpādapratīṣedhahetu と系をなして示されており、なおかつ Dharmakīrti の arthakriyāsamārtha の理論を前提とし、論議の展開の端緒としているのである。したがって、Śāntarakṣita, Kamalaśīla, Haribhadra が、勝義として「縁起有自性」論を標榜する者として Dharmakīrti を想定していたであろうことが、確かに知られる。この点を明白にする為に Haribhadra のその論述及び、その経緯を以下に示そう。それは元来『八千頌般若經』第三十一章の縁起を解説する部分であり、中観思想史上重要である。

Haribhadra のこの部分は、すでに天野宏英氏の研究があるが、本稿との関係上、再度、訳

(18) arthakriyāsamārthaṁ yat tad atra paramārthasat /
anyat samvṛtisat proktaṁ te svasāmānyalakṣaṇe //
戸崎(上) p. 61. cf. 本稿 fn (23a)

(19) 拙稿 cf. 本稿 fn (5).

(20) 天野宏英『因果論の一資料——ハリパドラの解釈——』(金倉博士古稀記念 印度学仏教学論集) p. 324.

出と解説を挙げておきたい。

『八千頌般若経』は《^(21-…)あらゆる〔因縁の〕和合から音が表わされる。消えつつある音も、どこかに行くのではない。善男子よ、まさしくそのように諸仏世尊の身体の完成は、因 (hetu) に依存し、縁 (pratyaya) に依存し、多くの善根の実践によって達成されたものである。単一の因、単一の縁、単一の善根からブツダの身体の顕現があるのではない。また無因なのでもない。多くの因と縁が集合 (sāmagrī) したとき生起するものである。その (ブツダの身体の顕現) は、どこからか、やって来るのでもなく、⁽²¹⁾ 因縁の集合が存在しないとき、どこかへ行くのでもない》と説いている。この主題を受け、Haribhadra は、先に示した、Śāntarakṣita, Kamalaśīla の勝義として「縁起無自性」、因と縁による生起を意味する「縁起」は実世俗 (tathayasainvṛti) と同質の見解を表明している。さらにその論議の中核をなすものが先に一言した如く、⁽²²⁾ catuṣkotiutpādapraṭiśeḍhahetu を根拠とする Dharmakīrti 批判なのである。その最初に PV, 現量 (3) ab を批判的に取り上げ、先の『八千頌般若経』の主題の解説に当てている。

【VIII】^(23-…) この場合、因果効力 (arthakriyāsamārtha) を有するものが、勝義的存在 (paramārthasat) である。^(23a) (PV 現量 3ab)

という論述に基づいて、プラマナに妥当した因果関係 (kāryakāraṇasambandha) によって、縁って生起したもの (pratītyasamutpanna) こそが、真実の (tāttvika) 如来であると、認識している人々の執着を否定する為に『八千頌般若経』の文は』説かれた。……単一のもの、生起せしめるものではない、と説明する。あらゆる〔因果の〕和合から音が表わされる。というこのことによって、仮に設定された (prajñaptika) 音を示すことによって、集合 (sāmagrī) の生起せしめる自性 (janakasyabhāva)^(23b) が、真実 (tāttvika) であるということ⁽²³⁾を論破する。

これに続いて、Haribhadra は、Jñānagarbha より、Śāntarakṣita, Kamalaśīla へと次第する、《多因→一果》《多因→多果》《一因→多果》《一因→一果》という因果関係の四つの型を順次破する、いわゆる catuṣkotiutpādapraṭiśeḍhahetu を根拠とする Dharmakīrti の因果論批判を展開する。⁽²⁴⁾ そしてその結末の部分で、次のように論述している。これは、Śāntarakṣita の MAV, Kamalaśīla の MAP ad MAK 63-72 び Kamalaśīla の ⁽²⁵⁾ Māl 後主張での「縁起無

(21) AAPV p. 969⁷⁻¹⁴, 梶山雄一 cf. 本稿 (2).

(22) 拙稿 cf. 本稿 fn (5).

(23) AAPV p. 969¹⁸⁻²⁵

(23a) 本稿 fn (18)

(23b) cf. HB8^{*16-9*1} jananasvabhāva, 拙稿 [本稿 fn (5)] p. 20-21⇒fn. (63)-(65). 戸崎 (上) pp⁶²⁻⁶³. fn (16), 桂 紹隆『ダルマキールティの因果論』(南都仏教第50号) p. 101. 上下。⇒本稿 fn (71a).

(24) Haribhadra は、先の部分に続いて catuṣkotiutpādapraṭiśeḍhahetu に基づく無自性論証を展開するが、その要所は HB の論述と一致する。このことは、Jñānagarbha, Śāntarakṣita, Kamalaśīla にとっても同様である。[cf. 拙稿, 本稿 fn (5) esp. pp24-26⇒fn (81)-(86), (69)]

(25) 本稿 [4] 資料——Māl 後主張和訳——

自性」論と符合するものである。

【IX】^(26a)それ故、諸の縁って生起したもの (pratītyasamutpanna) は、勝義として、吟味しない限り素晴らしいもの (avicāraikaramaṇīya) である。それは、丁度幻術師の現わし出した象等のように。それと同じように、これ等、色 (rūpa) 等のあらゆる存在物は、〔縁って生起したものであるから、勝義として、吟味しない限り素晴らしいものである。〕^(26a)というのは、自性因 (svabhāvahetu) 〔に基づく推論である〕。顕現するままに (yathādarśanam), 縁って生起すること (pratītyotpāda) が見られるから、証因は不成 (asiddha) ではない。同品に、存在するから、〔証因は〕^(26d)対立 (viruddha) でもない。先のものとの関連で、反所証を拒斥する検証 (vipakṣe bādhakapramāṇa) が示されるから、不定 (anaikāntika) ^(26c)でもない。したがって、この論理によって、丁度、音が縁に依存している生起のもの (pratyayādhinavṛttitva) であるから、仮に設定されたもの (prajñaptika) であるように、そのように、世尊の身体は、設定されたもの (vyavasthāpita) であるから過大適用 (atiprasaṅga) が何の役に立とうか。^(26b)

このように Haribhadra は『般若経』の解説の体を取りながら、実は、Dharmakīrti の因果論を、勝義としての「縁起有自性」論と見なし論破しようとしたことが明らかとなろう。さらに上記の Haribhadra の論述から pratītyasamutpādahetu による無自性論証の具体的な検証として catuṣkōtyutpādapratīṣedhahetu が位置付けられることが知られる。しかし、あえてその二者を区別するなら、前者は〈事物の生起の問題〉が考察の中心であるに対し、後者は〈感官知という認識論上の問題〉が主に吟味の焦点となる。また、それは各々 Dharmakīrti が HB で結果は二種であるとし、芽等の生起と感官知の生起とに区分するものに対応しよう。^(26d)が、特に Haribhadra にあってはむしろ、その両者を交えることを論難の方法としている。^(26e)この Dharmakīrti の「縁起有自性」論に対する批判は Haribhadra に先行して、Śāntarakṣita, Kamalaśīla によっても示されていた。

Haribhadra による論述 [VIII], ⁽²⁷⁾[IX] ⁽²⁸⁾のソースになったと考えられるものは、Śāntarakṣita の MAV 及び Kamalaśīla の MAP ad MAK 64-72 であろう。特に Kamalaśīla が、MAP ad MAK 65, 66 での先の論述 ⁽²⁹⁾[VI] 及び次の

^(30a)諸の縁起しているもの (pratītyasamutpanna) は、勝義として有と無という世間的習慣

(26) AAPV p. 976¹⁸⁻²⁴, cf. AAPV p. 884²⁵⁻²⁷, p. 885¹²⁻¹⁵⇒本稿 fn (11g).

MAP pp. 217²⁵-219²⇒本稿 fn (30).

(26a) ⇒fn (118)

(26b) ⇒fn (111)

(26c) ⇒fn (102)

(26d) 桂 紹隆 前掲論文 p. 100 下。

(26e) 拙稿 (⇒fn (5))

(27) 本稿 fn (23)

(28) 本稿 fn (26)

(29) 本稿 fn (16)

(vyavahāra) のやり方を超えた対象のものである。例えば、呪文 (mantra) 等のように。これ等、識 (vijñāna) 等も、それ等と同様である。というのは、自性因 (svabhāvahe³⁰tu) [に基づく推論である]。

と論述するものが、Haribhadra の [IX]⁽³¹⁾ の推論式に直接影響を与えたものであろう。なお、Haribhadra は、原子批判、形象真実論、虚偽論批判でも MAK, MAP から多大の影響を受けている⁽³²⁾。したがって「縁起 (pratītyasamutpanna) を証因とする無自性論証」の基本型は、Śāntarakṣita の MAV 及び Kamalāśīla の MAP ad MAK 64-72ですでに示されている。しかし、Kamalāśīla の Māl での論述が直接 Haribhadra に影響したとは思われない。その理由は、Haribhadra は AAPV を著わす時点で、特に、TS, TSP⁽³³⁾ また MAV や MAP を参照した点、さらに BhK⁽³⁴⁾ を知っていた点は確認されるのであるが、Māl を知っていたとは、今のところ筆者には確認が取れないからである。さらに Dharmakīrti の理論との関連から「縁起を証因とする無自性論証」の素型は Jñānagarbha の論述 [V]⁽³⁵⁾ に見出される。また、縁起を根拠とする無自性・空を立論する姿勢は Nāgārjuna⁽³⁶⁾、さらには『般若経』に遡源し得る。しかし、「縁起を証因とする無自性論証」を、「四極端の生起を否定する証因」(catuṣkotyutpādapratīṣedhahetu) 及び「一・多を欠いているという証因」(ekānekatvaviyogahetu) 等による無自性論証と共に組織化し、その点でチベット仏教の展開に多大な影響を及ぼしたのは、Kamalāśīla の Māl での論述であろう。

(30) MAP pp. 217²⁵-219²⇒本稿 fn (26), MAP p. 213⁶⁻¹³, AAPV, p. 884²⁵⁻²⁷⇒本稿 fn (16)

(31) 本稿 fn (26)

(32) cf. 拙稿 The Yogācāra-Mādhyamika Refutation of the Position of the Satyākāra and Alikākāra-vādins of the Yogācāra School. Part I: A Translation of Portions of Haribhadra's Abhisamayālaṃkāra-lōkā Prajñāpāramitāvyākhyā (仏教大学大学院研究紀要第12号, S. 59. Mar.) pp. 1-58.

Part II; idem, Part II. (坪井俊映博士頌寿記念仏教文化論叢, S. 59. Oct.) pp. 1-35.

(33) 拙稿『Kamalāśīla と Haribhadra——一切智者の証明を巡って——』(印度学仏教学研究, Vol. 35-1. pp. 115-119.

(34) 拙稿⇒本稿 fn (5), p. 4, fn (2), (3). 及び拙稿『Kamalāśīla と Haribhadra [2]——Haribhadra の引用する Bhāvanākrama I——』(仏教論叢第32号, 平成元年9月)

(35) 本稿 fn (15)

他にも、SDV D14a³⁻⁵ 構想された自性を欠き、顕現するがままのもの、すなわちあらゆる縁って生起したものが、一切智者によって、直接知覚として見られる (SDK 37).

諸事物 (vastu) は、無自性であっても、顕現するがままのものであり、実としての生起等を欠いたもの、すなわちまさしく縁って生起しているあらゆる様態の、あらゆる事物を、一時に、直接知覚として熟知する故、一切智者 (sarvajña) と言われる。

(36) cf. 本稿 fn (3).

(37) cf. 本稿 fn (2).

(38) K. MIMAKI BLO GSAL GRUB MTHA' (KYOTO, 1982) pp. 213-227.

ツォンカバ; Legs bṣad sñin po, Varanasi U. P. (1973). pp. 136²⁰-137¹.

【2】 pratītyasamutpāda と二諦説

いま、検討した Haribhadra の論述〔VIII〕⁽³⁹⁾〔IX〕⁽⁴⁰⁾では、キーワードは pratītyasamutpanna と示されている。それに対し、Kamalaśīla の Māl の論述〔II〕⁽⁴¹⁾では、BhK との一致する部分から Skt を求めると、pratītyasamutpāda である。この両者の、二諦説及び有無性・無自性との関係からの意味の相違が、筆者には、明確に読み取れるわけではない。チベット訳を参照しても、共に、rten ciñ 'brel bar 'byuñ ba⁽⁴²⁾である。したがって、〔I〕⁽⁴³⁾、〔III〕⁽⁴⁴⁾、〔IV〕⁽⁴⁵⁾、〔VI〕⁽⁴⁶⁾のチベット訳からは pratītyasamutpanna か、pratītyasamutpāda かは直ちに決定し得ない。しかし、それ等の混同と意味不明を避けるため上に示された用例に限られるが、その分析を試みよう。

〔VIII〕⁽⁴⁷⁾で、Haribhadra は、「pratītyasamutpanna は、勝義として、吟味しない限り素晴らしいもの (avicāraikaramaṇīya) である。」と述べ、その喩例として、幻術師の現わし出した幻 (māyā) としての象等を挙げている。これは、〔III〕⁽⁴⁸⁾の Śāntarakṣita の論述と内容は一致する。したがって、pratītyasamutpanna は、世俗、とり分け実世俗 (tathyasamvṛti) としての生起と考えられる。

他方、〔II-c〕⁽⁴⁹⁾の Kamalaśīla の論述では、世俗として、根拠を有するものと、有しないものとを区分し、「〔世俗として〕根拠を有するものは、勝義的自性はなくとも（勝義的には虚偽 alika ではあっても）、生起する。例えば、幻や陽炎のように。」と述べ、そして「幻 (māyā) 等は、世俗としては、pratītyasamutpāda であるとしても、勝義としては、実在するもの (vastutva) となってしまうことはない。」と明言している。この pratītyasamutpāda も、上に見た pratītyasamutpanna と同じく実世俗としての生起を、ここでは意味していると思われる。

勝義としては、共に無自性を指すであろう。

Śāntarakṣita は〔III〕⁽⁵⁰⁾の論述に続く部分で、また Kamalaśīla は Māl 後主張で、Nāgārju-

(39) 本稿 fn (23).

(40) 本稿 fn (26).

(41) 本稿 fn(11). 〔II-c〕, BhKI 218-9, 22a²⁻³.

(42) 〔VIII〕⇒fn (23) AAPV p. 969¹⁹⁻²⁰ pratītyasamutpanna=P. 414a⁷

〔IX〕⇒fn (26) AAPV p. 976¹⁸⁻¹⁹ pratītyasamutpanna=P. 420a⁶

〔II〕⇒fn (11) Māl P184b¹, D169a⁴ [=BhK I 218-9, 22a²⁻³, BhK, Tib, [269]²⁹] pratītyasamutpāda

(43) ⇒fn (10)

(44) ⇒fn (13)

(45) ⇒fn (14)

(46) ⇒fn (16)

(47) ⇒fn (23)

(48) ⇒fn (13)

(49) ⇒fn (11)

(50) ⇒fn (13)

na の『中論』XXIV-18 を活用し、論議の決め手としている。すなわち、

縁起 (pratītyasamutpāda) を空性と我々は述べる。その (空性) の説示は、仮に設定された特徴のものであり、その (空性) こそが中道である。

Kamalaśīla の、この部分の解釈が〔VII〕⁽⁵³⁾ の論述である。そこで Kamalaśīla は〈勝義的自性を欠いているから空である〉と言ひ、さらに Māl 後主張では、『弘道広頭三昧経』の〈不生・空⁽⁵⁴⁾ 〔海龍王経〕の〈縁起無自性⁽⁵⁵⁾〉の説示と合わせて示している。したがって、この場合の pratītyasamutpāda は、空性、勝義不生を表わしていると考えられる。それ故に pratītyasamutpāda は、実世俗としての生起を意味すると共に、勝義としては、不生、空性を意味すると思われる。このことは、同じく Kamalaśīla の『聖稲竿経広釈』及び BhK から支持されよう。一方、pratītyasamutpanna は、幻等の実世俗としての生起を意味しており、直接、勝義不生、空性を指しはしないであろう。pratītyasamutpāda の実世俗、勝義両面の意味を整理すれば、

pratītyasamutpāda $\left\{ \begin{array}{l} \text{因と縁による生起……実世俗} \\ \text{不生、空、真如……勝義} \end{array} \right.$

【3】 Dharmakīrti の因果論と自性 (svabhāva)

中観派の、勝義としての「縁起無自性」論と対論者の、勝義としての「縁起有自性」論との論争が、Jñānagarbha, Śāntarakṣita, Kamalaśīla, Haribhadra という後期中観派の学僧のテキストの上に展開されることが知られた。またその対論者は、Dharmakīrti であると特定し得る。その根拠は、その論議が arthakriyāsamartha 及び、svalakṣaṇa, sāmānyalakṣaṇa を巡って展開されている故、PV 現量⁽⁵⁷⁾ (3)⁽⁵⁸⁾ に代表されるような Dharmakīrti の実在物 (vastu) に関する定説が前提となっていることが明白だからである。さらに、〔II-a〕⁽⁵⁹⁾ 〔II-b〕^(59a) に対する前主張で対論者が、「一切法無自性は直接知覚によって証明されない」と中観派に対し詰問する論拠と

(51) MAV p. 204⁷⁻¹⁰

(52) ⇒fn (123)

(53) ⇒fn (17)

(54) ⇒fn (120)

(55) ⇒fn (121)

(56) ⇒fn (11e), 他に、二諦説の観点から、「縁起」の意味が示されているもの、つまり、実世俗としては「因と縁による生起」(＝無自性)、勝義としては有無を超えた真如、不生(＝無自性)を表わすものは〔VI〕⇒fn (16), 及び AAPV p. 884²⁵⁻²⁶, 885¹¹⁻¹⁵⇒fn (11g) から知られよう。

(57) ⇒fn (14)

(58) ⇒fn (18), (23a)

他に、「事物は、結果をもたらすにふさわしい特徴を有するものである」(arthakriyāyogyalakṣaṇaṁ hi vastu HB 3^{*14})「因果効力を有するものこそが、勝義的存在である」(sa paramārthiko bhāvo ya evārthakriyākṣamaḥ PV, I, 166ab) 拙稿⇒fn (5), p. 7.

(59) ⇒fn (11)

(59a) fn (11) Māl 前主張 [P144a⁸-b², D134a⁷-b²] 和訳参照

して、直接知覚 (pratyakṣa) 論を展開しているが、〔II-a〕に対するものとしては、

NB 1・15

実在物には、因果効力という特徴があるから。(arthakriyāsāmarthyalakṣaṇatvād vastunaḥ)⁽⁶⁰⁾

NB 1・16

一般相は、それとは別な特徴のものである。(anyat sāmānyalakṣaṇa)⁽⁶¹⁾

あるいは、「一般相は、知を設けることに関してさえも無能力であり、無能力が非実在物 (avastu) の特徴である」(PV 現量50)⁽⁶²⁾、「そういったこととは逆のものが、個別相である」(PV 現量51ab)⁽⁶³⁾等を前提として《直接知覚は、非実在物 (avastu、因果効力を有しないもの) を対象とするものではない》したがって《空は、直接知覚によって知られない》という反論が⁽⁶⁴⁾提示されたであろう。また〔II-b〕に対するものとしては、

NB 2・15

認識されるための他の諸縁が存在しているとき、まさしく直接知覚されるものが、自性である。(satsv anyeṣūpalambhaprātyayeṣu yaḥ pratyakṣa eva bhavati sa svabhāvaḥ)⁽⁶⁵⁾

等が前提となり、《直接知覚が、自性を有するものなら、その時、一切法無自性という主張 (pratijñā) は崩れよう。もし、それ (直接知覚) が無自性なら、どうして、それ (直接知覚) によって、あらゆる事物が離性 (vivikta) であると知られようか》という反論が⁽⁶⁶⁾なされたのであろう。

これ等の反論に答えて、Kamalaśīla は、〔II〕で、縁起 (pratītyasamutpāda) 論を二諦説と交えて展開し、世俗 (その場合、実世俗) としての生起を中観派も承認し、それは、勝義無自性と矛盾しないことを論述するのである。

以上が、Kamalaśīla が、Jñānagarbha, Śāntarakṣita の見解を受けて、Māl で、勝義として「縁起無自性」論を展開しているが、その対論者である「縁起有自性」論者として Dharmakīrti が特定され得るとの根拠である。さらに Dharmakīrti が対論者として特定される根拠を補強するために、Dharmakīrti の述べる、自性 (svabhāva)、無自性とは何かを検討しよう。

Dharmakīrti は NB 2・13⁽⁶⁸⁾で、無知覚 (anupalabdhi) を証因とする推論式を示した後 2・14 で次のように述べている。

(60) NB, p. 13¹⁵.

(61) NB, p. 14³.

(62) ⇒fn (77)

(63) yathoktaviparītaṁ yat tat svalakṣaṇam iṣyate / 戸崎 (上) p. 120.

(64) Māl, 前主張 P144a⁸-b², D134a⁷-b². cf. 本稿 fn (11) Māl 前主張

(65) NB, p. 23⁵.

(66) Māl, 前主張 P144b²-³, D134b².⇒fn (11) Māl 前主張

(67) ⇒fn (11)

(68) NB, p. 22¹⁻².

tatrānupalabdhir yathā / na pradeśaviśeṣe kvacid ghaṭa /
upalabdhi-lakṣaṇa-prāptasyānupalabdher iti //

認識する為の特性が具わっていることは、認識する為の他の縁の全てが具わっていることと特殊な自性である。

upalabdhilakṣaṇapṛāptir upalambhapratyayāntarasākalyaṁ svabhāvaviśeṣaś ca⁽⁶⁹⁾

つまり Dharmakīrti にとって、自性 A の認識が生起し得る為には、A 以外の諸縁の集合 B が過不足なく揃っていることを必要とする。したがって、自性 A と A 以外の諸縁の集合 B をまわって自性 A が、直接知覚される。自性 (svabhāva) が、他の因や縁に依存することは、そもそも自己矛盾であると、批判していたのは、Nāgārjuna である。Kamalaśīla は、勝義としての「縁起有自性」論を批判するに、その Nāgārjuna の『中論』XV-1, -2 を活用している。⁽⁷⁰⁾ Nāgārjuna の自性批判は、説一切有部等の実在論に向けられたものであろうが、⁽⁷¹⁾後期中観派にとっては、Dharmakīrti の「縁起有自性」論に対してである、ということの論拠が、上記の NB 2・14, 2・15 等からも知られよう。

また、Dharmakīrti は、HB. で、種等から芽等が生起することをモデルにし、因果関係 (kāryakāraṇabhāva) の成立と自性 (svabhāva) の問題に言及している。この点を要約して述べるなら、次のようになる。〈水等の協同する因 (sahakārin) を伴って、芽等を生起し得る自性 (svabhāva) を有した種等にこそ、因果効力 (arthakriyāsamartha) が存するわけであり、したがって、倉庫等であって芽等を生起し得ない種等には、因果効力という自性が存在しない^(71a)のである。〉

さらに、NB 2・15⁽⁷²⁾ に示されるように、Dharmakīrti にとり、直接知覚 (pratyakṣa) を生起させ得るものとは、自性 (svabhāva) を有するものである。それは、また PV 現量⁽⁷³⁾ (3) 等により、因果効力 (arthakriyāsamartha) を有するもの、個別相 (svalakṣaṇa) を有するもの、⁽⁷⁴⁾と言い得よう。それが実在物 (vastu) である。

他方、直接知覚を生起せしめ得ないものとは、何であろうか。それが、前者と性質を異にする知に顕現しないものであり、因果効力を有さないものであり、非実在物 (avastu) である。つまり、一般相 (sāmānyalakṣaṇa) を有するものであり、⁽⁷⁵⁾無自性 (niḥsvabhāva) なものである。Dharmakīrti は、一般相 (sāmānyalakṣaṇa) を有するものが非実在物 (avastu) であることを、知に顕現しない点から、また、効力を有しない点から論述している。

どうしてかと言えば、知にさえ、その (一般相) の特徴 (自性) が顕現しないからである。
kathañcid api vijñāne tadrūpānavabhāsataḥ (PV 現量⁽⁷⁶⁾ 48 ab)

(69) NB, p. 22²¹.

(70) ⇒fn (107), (108).

(71) 梶山雄一『仏教の思想 3 空の論理〈中観〉』p. 35, 岩波講座・東洋思想第八巻インド仏教 I. p. 43.

(71a) 拙稿 (⇒fn (5)) pp. 20-21. 及びその脚注 (63)-(66). 本稿 fn (23b).

(72) ⇒fn (65)

(73) ⇒fn (18)

(74) NB 1・15⇒fn (60)

(75) NB 1・15, 1・16⇒fn (60), (61). PV 現量50⇒fn (62), (77).

したがって、それ（一般相）は、知一般の対象を設けることに關してさえ、能力をもたない。それ（一般相）は、無能力であるから、無特徴（無自性）である。というのは、それ（無能力）は、諸の非実在物についての相であるからである。

jñānamātrārthakaraṇe 'py ayogyam ata eva tat / tad ayogyatā 'rūpam tad dhy avastuṣu lakṣaṇam// (PV 現量⁽⁷⁷⁾50)

また、Dharmakīrti は種 (jāti) (=sāmānyalakṣaṇa⁽⁷⁸⁾) の無自性性 (niḥsvabhāvatā) を PV 現量 (27), (32), (44)⁽⁷⁹⁾ で明言している。

この Dharmakīrti の pratyakṣa を生起する効力を有するもの (有自性) と有しないもの (無自性) を峻別する理論が、「縁起有自性」論として [III]-[IX]^(79a) で Jñānagarbha, Śāntarakṣita, Kamalaśīla, Haribhadra によって、中観派の「縁起 (pratītyasamutpāda) なるが故に無自性である」との理論と対比させられ、二諦説の問題として処理された。さらに Kamalaśīla により無自性論証の方法である pratītyasamutpādahetu として整備されたのである。特に、Dharmakīrti の理論が、そのターゲットとなっているとの決定的な決め手は、Haribhadra の論述⁽⁸⁰⁾ [VIII]⁽⁸¹⁾ [IX] に求められる。その内実は Kamalaśīla の論述⁽⁸²⁾ [I] に対する Māl 後主張と一致⁽⁸³⁾ する。

結 論

1. 「縁起を証因 (根拠)」pratītyasamutpādahetu とする無自性論証は、Kamalaśīla によって命名され、自性因 (svabhāvahetu) に基づく推理として整備された。その先駆は、Jñānagarbha, Śāntarakṣita が、すでに因と縁によって生起するものを実世俗 (tathyaśānvṛti) とし、勝義としては、不生、という二諦説を確立する点に見出される。
2. 後期中観派の「縁起無自性論」は、Nāgārjuna さらには『般若経』の见解を継承するものであるが、しかし、それは単なる継承、反復ではなく、際立った特徴を有する。つまり、後期中観派としての特色は、「縁起無自性論」に對立する「縁起有自性論」者を Dharmakīrti と想定し、Dharmakīrti の pramāṇa 論、因果効力 (arthakriyāsamārtha) に基づく因果論・実在論を論破することを目的としている。

(76) 戸崎 (上) p. 116. 及び fn (130), 同 p. 97. fn (87).

(77) 戸崎 (上) p. 119.

(78) 戸崎 (上) p. 88. fn (63).

(79) 戸崎 (上) p. 91, 92, 98, 99, 112, 112.

(79a) ⇒fn (13)-(26).

(80) ⇒fn (23).

(81) ⇒fn (26).

(82) ⇒fn (10).

(83) 本稿 [4] 資料——Māl 後主張和訳——

3. この姿勢は、『四極端の生起を否定する証因』(catuṣkotyutpādapratīṣedhahetu) による無自性論証と共に、Jñānagarbha, Śāntarakṣita, Kamalaśīla, Haribhadra へと順次継承され、後期中観派の伝統を形成している。つまり、実世俗として、Dharmakīrti の pramāṇa 論に負いつつ、勝義の検証では、Dharmakīrti の理論をも批判する。それが、Dharmakīrti 以後の、彼等の「一切法無自性論証」であり、この点に、インド後期仏教思想史の動向を見て取ることが出来る。

4. 後期中観派は、pratītyasamutpāda (縁起) を二諦説の観点から考察している⁽⁸⁴⁾。つまり、実世俗 (tathyaśamvṛti) としては、〈因と縁による生起〉を意味し、勝義の検証を通じては、勝義的自性の不生、空、有と無を超えた真如 (tathatā) を意味する。その両義性を有する具体例が幻 (māyā), 映像 (pratibimba) 等で示される。その際、自性 (svabhāva) とは、因と縁によって生起するものでないもの、つまり「縁起」と対立 (virudha) するものであり、Dharmakīrti の諸縁 (pratyaaya) に依存するものである svabhāva の理論とは異なる。

5. pratītyasamutpādahetu による無自性論証の具体的検証は、Dharmakīrti の因果論批判を内実とする catuṣkotyutpādapratīṣedhahetu による論証に委ねられる、つまりそれら二つの証因による無自性論証は連動するものであることが、Haribhadra の論述から明確に知られる。その先鞭は、Jñānagarbha の SDV. ad SDK., 8-15の直接知覚 (pratyakṣa), 因果効力 (arthakriyāsamārtha) に基づく二諦説、因果論に見出される。⁽⁸⁵⁾

【4】 資 料——Māl 後主張和訳——

[Māl. P238a⁶, D215a⁷]⁽¹⁰¹⁾

縁起故にというこの証因 (rten ciñ 'brel bar 'byun ba'i phyir zēs bya ba'i gtan tshigs, pratītyasamutpādahetu) は不定 (anaikāntika) である等と述べるそれ等の「反論に対する」返答も以前になし終っている。

[Māl. P226b⁴-228a², D205a⁷-206b²]^(101b)

縁って生起したもの (pratītyasamutpanna) は、勝義として自性という点で空 (svabhāvena śūnya) である。例えば、幻 (māyā) 等のように。〔この推論の〕証因は、不定 (anaikāntika) でもない。反所証に、前述の拒斥の検証 (sādhya viparyaye bādhakapramāṇa) があり得るからである。⁽¹⁰²⁾ 因 (hetu) と縁 (pratyaaya) に依って生起するものであるなら、自性 (svabhāva)

(84) Bhāvaviveka も同様な観点から因と縁による生起を解説している。Madhyamakahrdayavṛttitarkajvāla, D. No. 3856. 221b⁵⁻⁷. 山口 益『仏教における無と有との対論』pp. 538-539.

(85) 拙稿 ⇒ fn (5).

(101) 前主張 ⇒ fn (10).

(101a) cf. fn (16a).

(101b) (101) の「返答も以前になし終っている。」との以前とはこの部分を指す。したがって [I] の Māl 前主張に対する後主張は、事実上、以下に訳出する部分である。

(102) cf. [I-b], fn (26c).

は作られたもの (kṛtaka) となってしまうが、⁽¹⁰³⁾「それは」不合理なことである。作られないもの〔＝自性〕は他のものに依存し得ないからである。⁽¹⁰⁴⁾作られたものは、本性からして、自性を具えてはいない。自性は変化しないもの故、いかなるものによっても、他のものに作り変えられることはあり得ないからである。⁽¹⁰⁵⁾それ故、〔自性が〕正しいものであるなら、^(106…)生起していないものから生起することと、生起してからも無となることは、相互に矛盾するから、関係のないものである、と以前に論じたのである。^{…106)}したがって、〔証因は〕不定でもない。まさしく、それ故に、

自性が、因と縁とから生起するということは、不合理である。因と縁から生起するなら、自性は作られたものとなろう。⁽¹⁰⁷⁾〔MMK XV-1〕

自性が、どうして、作られたものであろうか。自性とは、作られないものであり、他に依存しないものである⁽¹⁰⁸⁾〔MMK XV-2〕

と、〔Nāgārjuna 先生によって〕説かれる。まさしくそれ故に、經典に「事物は常あるいは無常なる自性を有すると妄想するから、両極端な見解に陥る」と説かれる。『勝鬘經』に、

^(109…)すなわち、世尊よ、この二とは、両極端の見解というものである。というのは、断滅論と常住論である。世尊よ、あらゆる作られたもの (saṃskṛta) は、無常である、と考えるなら、それは、この断滅論となろう。それは、正しくない見解となろう。世尊よ、涅槃は、常住であると考えるなら、それは、この常住論となろう。それは、正しくない見解となろう。^{…109)}

と、説かれる。〔Nāgārjuna〕先生によっても、

事物を有であると承認する者は、常住論及び断滅論に陥るであろう。自性は、常住か無常かであろうから。⁽¹¹⁰⁾〔MMK XXI-14〕

云々と説かれる。それ故、〔証因 (=縁起) が〕 同品 (sapakṣa) にあり得るから、証因は、⁽¹¹¹⁾対立 (viruddha) でもない。〔証因が〕 異品 (vipakṣa) だけに有り得るものが、対立 (viru-

(103) cf. fn (107).

(104) cf. fn (108).

(105) cf. MMK. XV-8cd. prakṛter anyathābhāvo na hi jātūpapadyate [=Māl. P163a²⁻³, D150a⁷.]

(106) Māl. P162b⁸-163a¹, D150a⁵⁻⁶.

(107) na sambhavaḥ svabhāvasya yuktaḥ pratyayahetubhiḥ /
hetupratyayasambhūtaḥ svabhāvaḥ kṛtako bhavet //
[=Māl. P163a¹⁻², D150a⁶.] cf. NB. 2•15⇒fn (65).

(108) svabhāvaḥ kṛtako nāma bhaviṣyati punaḥ katham /
akṛtrimāḥ svabhāvo hi nirapekṣaḥ paratra ca //
[=Māl. P163a², D150a⁶ ad MMK XV-2ab.]

(109) Śrīmalādevīsīmhanādasūtra, P. Vol. 24. No. 760. P. 279b⁵⁻⁷.
cf 高崎直道訳『大乘仏典12如来藏系經典』pp. 112-113.
大正 Vol. 12. No. 353. 勝鬘師子吼一乘大方便廣經 p. 222a¹¹⁻¹³.
所謂常見斷見。見=諸行無常-。是斷見非=正見-。見=涅槃常-。是常見非=正見-。

(110) bhāvam abhyupapannasya śāśvatocchedadarśanam /
prasajyate sa bhāvo hi nityo' nityo 'tha' vā bhavet //

ddha) となるのであるが、同品 (sapakṣa) にあり得るものに対してではない。幻 (māyā) 等が、実在としてあり得ることもない。それ (幻等は) 知 (jñāna) と知の対象 (jñeya) と異なった特徴の自性を有するものであるから、と以前に述べ終っている⁽¹¹²⁾。その場合、空中の華 (ākāśapūṣpa) 等、不生 (anutpanna) な自性を有しているとは知られないけれども、縁起した^(112a)もの (pratītyasamutpanna) は、実なる自性を具えていよう、というこの〔汝の主張〕について⁽¹¹³⁾、でも、必然関係がないから、それ (縁起しているもの) からこれ (無自性) が、対立することにはなり得ない。能遍 (vyāpaka, =有自性) の働きが、所遍 (vyāpya, =縁起) を成立せしめない⁽¹¹⁴⁾。

また、虚偽 (alika) な幻等のものに関して縁って生起すること (pratītyasamutpāda) は、⁽¹¹⁵⁾全く成り立たない。それ故に、喩例の成立が不完全である、と〔汝が〕反論するそのことも、必然関係がない。もし、勝義的自性という点から想定して、幻等是不生であると言うのならその (主張) は、認められる。我々 (中観派) も、勝義的生起という点から考えているのである。証因 (hetu) は、教師 (śāstr) ではないが、かえって、両者 (反論者と答論する者) に成立する、顕現するがままのものからこそ考えるのである。というのは、学説 (siddhānta) に依存して、証因 (hetu) と主辞 (dharmin) 等を主張するのではない、と以前に述べ終っている⁽¹¹⁶⁾。〔反論〕 幻 (māyā) 等は、世間的習慣 (vyavahāra) としても、不生 (anutpanna) である。⁽¹¹⁷⁾〔答論〕 そういった主張は、まさしく世間に反するものである故、我々 (中観派) は、この (主張) を退けようとはしないのである。心静まった誰もが、呪文 (mantra) や薬等の縁 (pratyaya) を見はしても、生起を見はしない、と以前に述べた。この (言い分) は、賢者の笑⁽¹¹⁸⁾

(111) ⇒[1-c], fn (26b).

(112) ⇒fn (127), (128), (136a), Māl. P195a³, D178a⁶⁻⁷, 前主張 P146b³⁻⁴, D136⁵⁻⁶.

(112a) ⇒fn (10c).

(113) ⇒[1-c]. fn (10b), (10c).

(114) cf. fn (138a).

(115) Māl 前主張 P146b³⁻⁴, D136a⁵⁻⁶.

(116) ⇒Māl P191b^{3-a1}, D175b²⁻³. cf. AAPV pp638¹²-639¹.

事物の真实性 (tattva) を考察する場合、学説 (siddhānta) によって、真であると一般に承認された (prasiddha) 主辞 (dharmin) に誰も依存しない。そういった主辞は、反論者 (pravādin) と答論者 (prativādin) 双方にとって、どこにおいても成立しないからである。

Māl P192a⁷, D175b⁷

我々 (中観派) は、世間的習慣 (vyavahāra) によって、(対論者・答論者) 双方にとって、真であると成立する証因 (hetu) 等によってこそ、このこと (一切法無自性) を論証する。これと全く逆の見解、すなわち、ある学説 (śāstra) に基づく立論は、その立論者にとって有効なものとの見解は、Dharmakīrti によって示される。

NB. 3.46 etane yady api kvacic chāstre sthitaḥ sādhanam āha, tac chāstrakāreṇa tasmin dharminy anekadharmābhyupagame' pi, yas tadā tena vādinā dharmāḥ svayaṁ sādhayitum iṣṭaḥ, sa eva sādhyo netara ity uktam bhavati.

cf. NBT p. 56¹⁹⁻²³.

(117) cf. fn (11f)-(11h).

い草となるから、それ故、何況というのが、適している。そうであれば、証因は、不成 (asid-
dha) でもない。⁽¹¹⁹⁾世尊によっても、〔弘道広頭三昧経に〕

⁽¹²⁰⁾縁から生起するものは、不生である。それには、自性としての生起もない。縁に依存するも
のは、空であると言われる。空性を知る人は、注意深い。⁽¹²⁰⁾

と説かれる。

『海龍王経』にも、

⁽¹²¹⁾依存して生起するものは、自性という点では、何もない。無自性なものの、どこにも生起す
ることはない。⁽¹²¹⁾

と説かれる。〔Nāgārjuna〕先生によっても、

縁って生起するものは、自性という点で、寂靜である。したがって、生起しつつあるものと
生起も寂靜である。〔MMK VII-16〕⁽¹²²⁾

と説かれる。また、

縁起 (pratītyasamutpāda) を空性であると我々は述べる。その(空性の説示)は、仮に設定
されたものである。まさしく、その(空性)が中道である。〔MMK XXIV-18〕⁽¹²³⁾

と説かれる。

【5】 カマラシーラ pramāṇa 論 解説

中観派の主張する「縁起を証因とする無自性論証」は、次のような推論式に書き改められよ
う。⁽¹²⁴⁾

(118) 〔II-c〕 ⇒fn (11i). cf. fn (30)

(119) cf. fn (26a).

(120) 大正 Vol. 15. No. 635. p. 497b⁵⁻⁴.

縁生彼無生是不興自然

義縁斯亦空知空彼無欲

Māl. P163a³⁻⁴, D150a^{7-b1}.

Prasannapāda, ch. XXIV. p. 491¹¹⁻¹⁴, 500⁷⁻¹⁰, 504¹⁻⁴. ch. XIII. p. 239¹⁰⁻¹⁴.

yaḥ pratīyair jāyati sa hy ajāto na tasya utpāda svabhāvato' sti /

yaḥ pratīyādhīnu sa śūnya ukto yaḥ śūnyatām jānati so'pramattaḥ //

MAT. p. 229³⁻⁵. *Prajñāpradīpamūlamadhyamikavṛtti*. D. No. 3853, ch. XXIV. 230b³.

(121) Māl. P163a⁴⁻⁵, D150b¹⁻² にも引用される。また、MAV. p. 222¹³⁻¹⁶ にも引用される。一郷正道博士の fn を基に典拠を挙げておく。

聖海意所問大乘經，大正 Vol., XIII. No. 400, p. 494a¹⁶⁻¹⁷;

謂諸法縁生 自性無所有

若自性不有 即無少法生

(122) pratītya yad yad bhavati tat tac chāntam svabhāvataḥ /
tasmād utpadyamāna ca śāntam utpattir eva ca //

(123) yaḥ pratītyasamutpādaḥ śūnyatām tām pracakṣmake /
sā prajñāptir upādāya pratipatsaiva madhyamā //

(124) cf. 〔I-a〕 fn (10), (10a), 〔VI〕. fn (16). 〔IX〕 fn (26). fn (30): cf. K. MIMAKI, idem, p. 222¹³⁻¹⁶.

〔A〕

縁起せるものは、無自性である。例えば、幻等のように。(必然性)

因果効力 (arthakriyāsamartha) を有するものは、縁起せるものである。(所属性)

因果効力を有するものは、無自性である。(結論)

他方、中観派の典拠に基づいて対論者 (Dharmakīrti) の主張を表わせば、次のような推論式が想定されよう。⁽¹²⁵⁾

〔B〕

縁起せるものは、有自性である。例えば色等の顕現のように。(必然性)

因果効力を有するものは、縁起せるものである。(所属性)

因果効力を有するものは、有自性であ。^(125 a) (結論)

中観派の推論〔A〕に対して、対論者は、証因が対立 (viruddha) であると反論していた。⁽¹²⁶⁾ つまり異品 (vipakṣa) である有自性なるものにだけ、縁って生起するということ (pratītya-samutpāda) が有り得るとの反論である。

また喩例である幻 (māyā) 等について、もし、幻等が、知 (jñāna) を自性とするものであるか、知の対象 (jñeya) であることを自性とするかであれば、幻等は、実在物 (vastu) 〔対論者にとって有自性なもの〕となってしまうとの中観派への詰問がある。⁽¹²⁷⁾ この点に関して、中観派は、幻等は、知 (jñāna) を自性とするものでもなく、知の対象 (jñeya) を自性とするものではないと答論し、⁽¹²⁸⁾ 幻等が無自性なるものの喩例として適することを述べるわけである。このことは以前に示したとあるように、⁽¹²⁹⁾ その以前の部分で、上記の問題に対する Kamalaśīla による詳細な答論が知られる。⁽¹³⁰⁾

Kamalaśīla は、そこで、結局のところ、論理学上の規則——1) 対立関係 (viruddha), 2) 遍充関係——及び3) 因果関係の問題を、二諦説の問題に帰せしめ、つまり、世俗として、それ等の意義を認め、勝義的自性はあり得ないという立場から答論している。勝義に導くに相応しいものとしてプラマナを承認するというものである。すなわち、「縁起」を証因 (pratītya-samutpādahetu) とする無自性論証は、最終的には論理学それ自体の取り扱いを巡って、二諦説の問題との関係の上から処理されるのである。

一切法無自性論証と前述の論理学上の問題1)～3) を Kamalaśīla の論述に沿いつつ検討しよう。

(125) cf. [I-b] [I-c] fn (10b) [VIII] fn (23).

(125a) この推論式は、刹那滅論証の場合のように、三名辭が同延となる。

(126) [I-c] fn (10b).

(127) fn (112). (136a).

(128) ⇒fn (112). (136a).

(129) fn (112). (136a).

(130) Māl. P193b⁴-195b⁸, D177a⁸-179a⁸. ←前主張 P145b⁴1146b⁴, D135b⁴-136a⁸.

1) 対立 (viruddha) に関しては, Māl 前主張で対論者は, 一切法無自性と対立するもの⁽¹³¹⁾の認識 (viruddhopalabdhi) 等もあり得ない, とする中で中観派を詰問している。そして, NB 3・74によって, 「諸の事物にとって対立 (viruddha) は二種確定される」すなわち, 二種とは, NB 3・75~77に示される如く, 「同時に存在しないことを特徴とするもの」と「相互に排除し合って存在する特徴のもの」である。「そういった二種の対立も一切法無自性論者 (= 中観派) にはあり得ない」との反論が見られる⁽¹³²⁾。これは, そもそも Dharmakīrti の論理学は実在物 (vastu) を前提とするものであり, 無自性を論証するものではないとの主旨に基づくものである。それに対し, Kṃlaśīla は Māl 後主張で次のように答弁している。

^(134a) この対立 (viruddha) も, 世間的習慣としての事物 (vastu)^(134a) に依存して述べられるのであるが, 実として「[の事物に依存して述べるの]」ではない。^(134b) 火と冷たさ等にとって, 実なる外界の対象 (= jñeya) としての自性は, 成立しないし, 知 (jñāna) の形象を自性とする^(134c)ことも, 構想されたこと (kalpita) であるからである。単一な知に, 冷たさと熱さという二つの現われがあり得るから, どうして「冷たさと熱さが」対立しようか。^(134d)その二は, 同時に知覚されるからである。^(134e)同種で多なる知識 (vijñāna) は, 同時に生起しないからである。^(134f)したがって, 夢等のように虚偽な (alika) 冷たさ等の事物が現われるから, それ故, それ等 (冷

(131) Māl. 前主張 P145b⁴-146a⁶, D135b¹⁻⁷.

(132) Māl. 前主張 P 145b⁵-146a⁶, D135b²⁻⁷. =NB. 3・74~77.

NB. 3・74. dvividho hi padārthānām virodhaḥ.

NB. 3・75. avikalakāraṇasya bhavato' nyabhāve' bhāvād virodhagatiḥ.

NB. 3・76. śītoṣṇasparśavat.

NB. 3・77. parasparaparihārasthitalakṣaṇa tathā vā bhāvābhāvavat.

cf. 戸崎(上). p. 163. fn (226), p. 165. fn (232).

(133) cf. 戸崎(上). p. 170. PV 現量 (96).

(134) Māl. P194b⁶-195a¹, D178a³⁻⁵.

(134a) ⇨NBṬ. p. 13¹⁸.

事物という言葉は, 勝義的存在ということと同義語である。

vastuśabdaḥ paramārthasatparyāyaḥ /

(134b) NBṬ. p. 69¹¹.

一方, 対立は, 実在物ではないと述べる人々は, 次のことを知らなくてはならない。

ye tv āhur na virodho vāstava iti ta idaṃ vaktavyāḥ /

NBṬ. p. 69¹⁴.

したがって対立も, 実在のものなのである。

cf. PV 現量 (96). 戸崎 (上) p. 170.

(134c) ⇨fn (112).

(134d) Haribhadra も, Kṃlaśīla と同様な「対立」に関する見解を称している。AAPV. p. 535^{25-536⁴} (=TSP. p. 1121^{18-1122⁹}. この両者の一致については別稿を期す。) Dharmakīrti の「対立」の定義とは正反対である。⇨NB. 3・75-76. fn (132).

(134e) ⇨PVṬ (Ś) 自比量 D33b⁴.

対立するものは, 一つのものに同時にあり得ない。例えば, 冷たさと熱さのように。

(134f) PV 現量 (501cd), 戸崎 (上). p. 185.

それら (知) には, 同種のものに関して, 効力に限定があろう。

tāsām samānajatīye sāmāthyaniyamo bhavet //

たさと熱さの二] に、実として、対立 (viruddha) は存在しない。^{(134g)---(134)}

2) 遍充関係に関しては、能遍の無知覚 (vyāpakānupalabdhi) によっても、一切法無自性は論証され得ないとの詰問で、「あらゆるものが、自性を具えていない場合、どうしても、遍充関係 (vyāpti) は成立しない。もし、成立するなら、遍充関係自体が、実在物 (vastu) であることになろう。」⁽¹³⁵⁾

これは、遍充関係も、実在物 (vastu) の間で成立し得る、ということを前提にした、無自性論証に対する詰問である。これに Kamalaśīla は次のように返答している。

^(136...) 所遍 (vyāpya) と能遍 (vyāpaka) の関係も、世間の習慣である木とシンシャパ等の関係に依存して構想された (parikalpita) 一般 (sāmānya) と特殊 (viśeṣa) の関係の確定によって設定される。事実として、能遍である木という性質等といった一般 (sāmānya) というものは、実としては、何も存在しない。特殊 (viśeṣa) 等というものの、外界の対象 (=jñeya) を自性とするのでもないし、知 (jñāna) の形象 (ākāra) を自性とすることも、実としては、^(136a) 成り立たないけれども、かえって、真実の意味 (tattvārtha)、無関心 (upekṣā) に立脚している諸の賢者は、象のように観察して、夢等で、khadira 樹等の虚偽にして多様な特殊性 (viśeṣa) を知覚する如くである木等の事物の虚偽性に依存して真実 (tattva) に入る為に、^{...136)} 勝義に入ることに相応しいから、所遍と能遍の関係を確定することである。

遍充関係も、世間の習慣 (vyavahāra) に依存するものであり、勝義として、自性 (svabhāva) を有するものではない、と述べることによって、無自性論証も、世間の習慣に依存して遂行され得る、というものである。

(134g) 対立 (virodha) は、実として成立するものではない、との見解は、Śāntarakṣita によっても、TS. 441-443 で示される。

瞬間的 (kṣanika) 諸存在は二種である。あるものは、減退の原因である。例えば、火等が冷たさ等の (減退の原因である) ように。他のものは、そうではない。(441)

一方、真実を見ていない世間の人々は、因果関係 (kāryakāraṇabhāva) が存在していても、先に述べた諸の事物に関して、対立 (virodha) を種々に考える。(442)

諸の事物 (vastu) にとって、退けるものと退けられるものの関係 (bādhyabādhakabhāva) は、決して真実なもの (tāttvika) ではない。したがって対立というあり方 (virodhagati) と [NB. 3・75 で、Dharmakīrti によって] 言われたのも、まさしく「そういうことであると」知られなくてはならない。(443)

また、Kamalaśīla は、TSP. ad TS (443) で NB. 3・75を引用し、次のように述べている。

TSP. p. 196¹⁸⁻²⁰.

ata evāvikalakāraṇasya bhavato 'nyabhāve' bhāvād virodhagatir [NB. 3・75] ity ācārye-
pōktam / virodhagatiḥ virodhavyasāyaḥ, na tu virodhas tāttvika iti bhāvaḥ /

まさしく、それ故に、「Aの」原因は完全であっても、他のもの「B」が存在する場合、「Aが」存在しないことから、「AとBの」対立というあり方がある。と [Dharmakīrti] 先生によって述べられている。対立というあり方とは、対立ということの取り決めである。一方、対立は、真実なものではない。

(135) Māl, 前主張 P146a⁵⁻⁷, D136a¹⁻².

(136) Māl, 後主張 P195a¹⁻⁶, D178a^{5-b2}.

3) 因果関係について、対論者は、原因の無知覚 (kāraṇānupalabdhi) に言及する中、「一切法無自性に関しては、因果関係 (kāryakāraṇabhāva) は成立しない。成立するなら因果関係自体が、実在 (vastu) となろう」と詰問している。これに対し、Kamalaśīla は、次のように答えている。

^(138...)
同様に、因果関係は、種と芽等の世俗 (saṃvṛti) ⁽¹³⁷⁾こそ依存して世間的習慣を設けるのであるが、実なるもの (samyak) ではない。実なる種等は成立しないから、また夢等で、そのように虚偽なものも、顕現するからである。目覚めている場合にも、因果としてあり、真実 (satya) ではない幻 (māyā) 等も、認識されるからである。したがって、世間的習慣 (vyavahāra) から、因果関係 (kāryakāraṇabhāva) 等が、諸事物が自性を有していることを遍充するのであるが、かえって、そのことから、それ等 (諸事物) が、勝義的自性 (paramārthasvabhāva) を有することは、成立しない。能遍 (因果関係) の存在から、所遍 (有自性) ^(138a)の確定が成立するのではない。もし、諸事物に、事物の自性が存在する場合、実として、能遍すなわち因果関係等が否定されるなら、幻 (māyā) 等と同様に、実として構想されている (parikalpita) ^{(138b)...}それ等事物の自性は、否定されよう。

以上のように、因果関係 (kāryakāraṇabhāva) も、先の対立関係 (viruddha)、遍充関係 (vyāpti) も共に世間的習慣 (vyavahāra) に依存して設定されると Kamalaśīla は考えている。この世間的習慣に基づく設定が、勝義である無自性を論証し得る、というのが Kamalaśīla の姿勢である。この、Kamalaśīla が、Dharmakīrti の pramāṇa 論によって、無自性論証が可能であるとする理由は、pramāṇa を勝義に導くに相応わしいものと位置付けるからである。すなわち、

^(139...)
諸の賢者達は、それ (ātman) を否定して、人 (pudgala) と法 (dharma) に関する無我 (nairātmya) の真実に入るに相応しい業とその果報の関係等の世俗 (saṃvṛti) 的確定の設立根拠である直接知覚 (pratyakṣa) 等のプラマーナの定義を明晰に行うのである。それも、世尊によって承認されるから、それ故に、我々 (中観派) は、プラマーナの定義を明晰にし ^{...139)}て、勝義 (paramārtha) に相応わしい (anukūla) ものであると認めるのである。

(136a) ⇒fn (112), (127), (128).

(137) Māl. 前主張 P146a⁷⁻⁸, D136a²⁻³.

(138) Māl. 後主張 P195a^{6-b2}, D178b²⁻⁵.

(138a) cf. fn (114).

(138b) cf. PV. 現量 (98). 戸崎 (上) p. 173.

tatrāpi vyāpako dharmo nivṛtter gamako mataḥ /
vyāpyasya svanivṛttis cet paricchinā kathāñcana //

その場合にも、能遍が、何らかの仕方て自己の否定を確定するなら、所遍の否定が知られると考えられる。

(139) Māl. P195b⁵⁻⁷, D179a¹⁻².

kamalaśīla は推理 (anumāna) についても、世間 (loka) での、周知の事柄 (prasiddha) に基づくとしながらも、勝義を確定し得ると位置付ける点を Dharmakīrti の理論を逆用して立論し

このように Kamalaśīla は実在物 (vastu) を前提とする Dharmakīrti のプラマーナ論を、vastu が勝義的自性を有しないことの論証に有効なものと考え、活用するのである。⁽¹⁴⁰⁾つまり、実世俗 (tathyaśaṃvṛti) の範囲で Dharmakīrti のプラマーナ論を採用し、それを勝義無自性の論証に有効なものとして用いるのである。それは、実世俗として Dharmakīrti のプラマーナ論の借用であると共に、勝義としてはその Dharmakīrti のプラマーナ論批判でもある。結局 Kamalaśīla のプラマーナ論の特徴は、無自性論証と二諦説の接点で展開されるところにある。その一つが pratītyasamutpādahetu による無自性論証なのである。

〈1989年9月20日原稿提出〉

ている。PV. 自比量. K°85-86 (=Mal [P187a⁸-b¹, D171b⁵-6], PV. 現量. K°356-357 (=Mal P 187b²⁻⁴, D 171b⁶⁻⁷):

(140) Kamalaśīla はプラマーナの採用に関して「我々も、言葉だけで、一切法無自性を証明するのではないし、帰謬 (prasaṅga) 論証だけによってでもない。プラマーナによって証明する」と明言している。拙稿『カマラシーラの唯識批判とダルマキールティの経量部説——無自性論証の視座 tatsārūpya と tadutpatti——』（仏教大学研究紀要通巻第72号、1988年3月）p. 24 以下。